第６回泉佐野丘陵緑地運営会議

日時：2011 年３月４日（金）　10：00～12：15
場所：大阪府庁新分館　１号館２階　共用会議室

出席委員（敬称略）
大阪府立大学大学院　生命環境科学研究科　教授　増田昇（委員長）
大阪大学大学院　工学研究科　教授　澤木昌典
元大阪府立大学大学院　教授　前中久行
大阪府立大学大学院　生命環境科学研究科　准教授　下村泰彦
大阪市立大学大学院　工学研究科　准教授　嘉名光市
元読売新聞編集委員　清野博子
大阪ガス株式会社　エネルギー・文化研究所（CEL）客員研究員　弘本由香里
うみべの森を育てる会　西台幸子
泉佐野丘陵緑地パーククラブ　会長　殿元日出夫
泉佐野丘陵緑地パーククラブ　副会長　杉本和彦

大輪会　末澤事務局長（オブザーバー）

欠席委員
NPO 法人プラスアーツ代表　永田宏和
泉佐野市都市整備部　部長　松下義彦
泉佐野観光ボランティア協会　吉野勝

◆傍聴者
一般　４名

◆議事
〇泉佐野丘陵緑地東地区の砂防堰堤の工事について大阪府より報告
主な意見
・資料に掲載されている工事の範囲以外にも工事の影響は出るはずである。土木構造物をつくる際には事前にそのエリアの植生調査や生物調査を行うべきである。
・化粧型枠をつけた割石は本当に必要か。イメージ図では側面だけに割石を貼っていて、上部は何もデザインも施されていないので違和感がある。
・樹木を切らずに道を整備するという原則を決めてしまうと、計画が膠着し非合理的になってしまうので、動かしてもよいと判断できる樹木は計画的に動かして工事を進める必要がある。
・砂防堰堤工事のエリアは中地区ではなく東地区である。基本計画では中地区を中心に整備をしていくという計画であった。周辺住民に中地区だけでなく東地区も工事を開始しているという誤解を招かな

いよう、渓流河川の安全性を保つための工事であり、公園整備の一環ではないということを示す必要がある

〇報告案件について

事務局から「H22 年度運営会議　開催計画・実績」、「パーククラブ活動報告」について報告した。

主な意見

・タケノコの件について、運営会議において年間活動計画で承認されたものは、大阪府が財産放棄をしたとみなす。これはタケノコだけでなく、農作物についてもあてはまる。
・タケノコ掘りイベントについて、決定事項に「掘った経験のある人がきちんと教える必要がある」とあるが、今回の目的は竹林の侵食を防ぐことであるということ、地面の中のタケノコだけでなく、地面から出ているタケノコも取り除くという説明も加えていただきたい。
・開会あいさつの際に、タケノコ掘りイベントの主旨は単に遊びではなく竹林の拡大抑制という目的を伝えていただきたい。
・タケノコ掘りイベントのように、今後一般府民がイベントに参加する機会が増える。その際にパーククラブの活動内容を伝えられるよう、名刺代わりに渡せるリーフレットがあればよい。Ａ３両面程度が望ましい。表面には公園の理念や将来像、中地区の状態、裏面にはパーククラブの設立主旨や目的、右側に活動風景や年間活動の紹介などを掲載するイメージである。
・パネルも２、３枚程度を作成しておき、イベントの時に公園の主旨と目的、活動の持っている意味を伝えていただきたい。
・パーククラブは、今後メンバーが増えていくこと想定されている。「パーククラブがどのような組織なのか」を広く府民に伝えていくことと同時に、パーククラブ内部で情報を共有するという意味でも活動を伝えるツールは必要である。
・パーククラブが「地域のクリーン作戦」の一環として活動されてもよいのではないか。
・地域との協働に加えて、ぜひ学校もうまく巻き込んでいただきたい。環境学習として当該公園を利用してもらえる戦略を少しずつ考えていただきたい。
・公園が位置している校区の小学校と連絡をとり、総合学習をパーククラブが実施してはどうか。出前型の授業でもよいし、現地に来ていただいて実施するのもよい。
・タケノコ掘りなど、イベントをした際にもアンケートをとっておくと後々の役に立つ。

〇協議案件について

事務局から「パーククラブによる養成講座について」、「23 年度運営会議開催計画について」について説明した。

主な意見

（パーククラブによる養成講座について）

・現地作業にカワウの調査が予定されているが、現在は鳥インフルエンザが発生しているので、その点も配慮していただきたい。

〇合意形成案件について

事務局から「パークセンター基本設計の検討について」、「コラボレーション区域の検討について」、「パーククラブ 23 年度活動計画について」について説明した。

主な意見

（パークセンター基本設計の検討について）

・府民がつくる公園として、パークセンターの受付にパーククラブがいないのは、当該公園の理念から外れているのではないか。

・事務室の使用についてパーククラブの欄に×がついている資料がおかしい。ボランティアルームの必要性について考える必要がある。開園時にパーククラブがどのような組織になっているかによって事情は変化する。将来的には、ＮＰＯ法人化や、管理者の一翼を担う可能性がある、ということも含めて、事務室の使い方を柔軟的に考えていただきたい。

・事務室は１フロアではなく、間仕切りなどが必要である。苦情対応や緊急対応など、事務局として管理者が常駐しなければいけないエリアと、パーククラブが存在するエリアは分けたほうが良い。

・裸地化した部分にユリを植えることは難しい。ユリを植えるのであれば、土の部分をさらに厚くする必要がある。ササユリよりもオニユリが望ましい。

・泉佐野地域の民家、農家をデザイン規範にした休憩室とロックガーデンではコンセプトが繋がらない。基本理念とデザインコンセプトに整合しているかどうか検討する必要がある。

・ビジターホールは柱が入る可能性があり、ホールとして使い勝手が悪くなることはないと思う。

・トイレとシャワールームなどの水周りは隣接していることが望ましいが、シャワールームとビジターホールが隣接しているのはよくない。

・パークセンターの敷地北側にスペースがあまりないのが気になる。切り立ったところにパークセンターが建っているイメージである。スペースを確保するか、建物より高い高木を植えるとよい。

・分棟案を採用しているが、建物の配置に角度がついていないので、奥行き感、立体感がない。もう少し北側の配置について検討していただきたい。

・草屋根を実施する部分が少ない。もっと広範囲に実施した方がよい。

・研修室については、机や椅子を収納する倉庫のようなスペースがあった方がよい。

・入り口が北側にあるので、冬に人が出入りするときに冷たい風が入ってくるのではないか。

・将来的にパーククラブの人数が 200 名程に増えた際には、専門部会や、曜日によって活動する班をつくり、毎日常駐することを考えている。

・広大な法面や草屋根について、当該公園でどのように考えてつくっていくのかと合わせて考えていただきたい。大阪の長屋再生で草屋根の実験を行っている所は、大阪の身近な土手にあるような草と季節感を演出する草花が植えられており、まち中でリラックスできる空間になっている。身近な雑草の良さを感じられる。法面の植生や草屋根の植生についても付近の農村風景や心に馴染む植生を検討していただきたい。

（コラボレーション区域の検討について）

・22 年度の実施区域の到達点や残された課題、成果を受けたゾーニングや維持管理方針が整理されてない。22 年度区域の中で追加調査が必要であれば、どのような追加調査が必要なのか、新たに整備すべき内容はどのような内容か、それに対してパーククラブとどのような連携をとっていくか等、23 年度区域においても同じように整理する必要がある。その上で、パーククラブとどのように連携していく

のかを検討すべきである。

・阪和道から当該公園の見え方について検討されたことはあるのか。高速道路を通っている人にもアピールできるのではないか。

・コラボレーションエリアの緩やかな将来像がまだ運営会議で共有できていないと感じている。まずはたたき案をつくり、そのたたき案を中心にパーククラブと大阪府が考えたものを一度議論する必要があると感じている。それにもとづいて管理の形態や協働でどう手分けしてやっていくのか決める必要がある。

・５月の運営会議では 22 年度のコラボレーションエリアの到達点を整理していただきたい。細分化されてなくてもよいので、今の段階で到達しているゾーンのイメージと面的施設の整備、どのような施設が建てられるのかを提示していただきたい。

（パーククラブ 23 年度活動計画について）

・基本方針、活動計画に記載されている「コラボレーション区域のゾーニング検討」とは平成 22 年度の区域であり、平成 23 年度の区域をどのようにするかという議論も必要になる。上半期までに 22 年度のコラボレーションエリアのゾーニングを行い、23 年度の区域については検討を進めるという内容を追加しておいた方がよい。

・新たな園路整備の経路選定についてもパーククラブに協力してもらいながら、23 年度の実施設計を行う必要がある。どの部分を協力してもらいながら展開していくかを密に連絡をとりながら計画しなければ、パーククラブの活動の中に反映できない。

・全てパーククラブが主体になって実施するのは負担が大きいので、地域のクリーンキャンペーンへの参画については工区で調整して欲しい。

・竹林除去については、竹やぶの中心部ではなく、侵食が進んでいる部分で行うのが効果的である。タケノコだけではなく、１、２年目の若竹も除去していただきたい

・パーククラブの活動はとてもすばらしい活動なので、新聞各社にも情報提供を行えば、記事として取り上げてもらえる可能性が高い。タイミングの良い時期に一度情報提供を行っていただきたい。